

令和3年2月1日発行
企画・編集 松崎 靖
発行 (株)足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380 (〒376-0101)
TEL 0277-73-1212
Fax 0277-70-1066

虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月1日発行する地域新聞です。

虹の架橋

今月の題字
太田 徹さん

(桐生市新里町)

令和元年に「わたらせ養護園」の施設長に就任した太田さん。広報紙「とんがりやね」を読むと、太田さんと子どもたちとの深い絆が感じられます。

虹の架橋「検索」で、インターネットからでもご覧いただけます。

五人が再集結！
カルテット・エスペラント+
「新型コロナウイルス感染症対策対応公演」と銘打って『カルテット・エスペラント+』コンサートが開催されます。カルテット・エスペラント+は、フルートの荒川洋さん、ヴァイオリンの比呂美さん、チェロの弘田徹さん、ヴィオラの村松龍さんの弦楽四重奏にパーカッションの中里ゆきさんを加えた五人編成。クラシック

新型コロナウイルス感染症対策対応公演
カルテット・エスペラント+
2021. 3.14 (日) 15:00開演
笠懸野文化ホール(パル)

カルテット・エスペラント+公演
2021年3月14日(日) 15:00開演
笠懸野文化ホール(パル)
一般 前売1,500円 当日2,000円
高校生以下 前売・当日共500円

クナ楽曲から新感覚なジャンルまでを網羅し、世界に訴えるエスペラントな音楽を目指しています。荒川洋さんは、「千と千尋の神隠し」などスタジオジブリ作品の演奏を手掛け、みどりジュニアアカデミーの指導や新設される笠懸西小学校(仮称)の校歌制作も手がけています。当日は「大間々祇園囃子のためのラプソディ」なども披露される予定。荒川洋さんのみどり市への熱い思いが伝わってくるコンサートになりそうです。



小耳にはさんだ
いい話
(文責・靖)
《306》

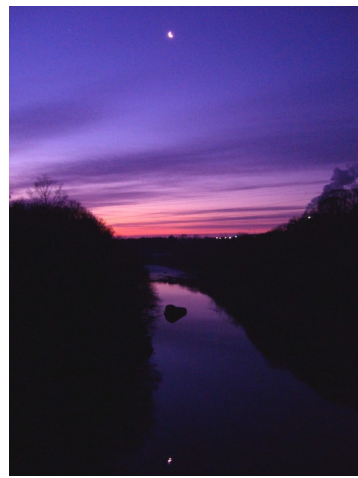
『岩宿時代』を広めよう

日本における旧来の考古学の定説では、縄文時代(一万六千年)以前の日本は富士山などの火山活動が活発で、火山灰が堆積した関東ローム層の年代は人間が生活できる自然環境ではなかったとされてきました。そのため専門家の発掘調査では関東ローム層から下には人類の痕跡はないと判断されてきました。昭和二十四年、自転車で行商をしながら独学で考古学を研究していた相沢忠洋さんは、岩宿(現みどり市笠懸町)

の関東ローム層の中から黒曜石の小さな石器を発見しました。この小さな石器の発見は、日本の歴史を二万年近くも遡らせた歴史的大発見でした。相沢さんの著書『岩宿の発見』を読むと、相沢さんの生い立ちや岩宿遺跡を発見するまでのエピソードに深く感銘を受けます。明治天皇の玄孫の竹田恒泰先生はユーチューブ『竹田学校』で「世界最古の磨製石器は日本で製されたのが岩宿遺跡です。それが初めて発見されたのが岩宿遺跡で、三万五千年前のものでした。打製石器は猿でも



世界一小さな
定利屋
トイレ美術館



『月影』松崎 靖

今月の写真《306》

何年か一度だけ、夜明け前の下弦の月が渡良瀬川の川面にくっきりと映る日があります。雲がなく、風が川面を揺らさない静かな真冬の六時十五分頃、高津戸橋の上から撮った写真が残っています。日の出前三十分くらいの時刻で月の満ち欠けの巡り合わせと天候によって奇跡的に撮れた写真。あれから十年以上経ちますがこれ以上のシャッターチャンスに恵まれたことがありません。この写真と同様に人と人との出会いも奇跡的な巡り合わせかもしれません。その時その時の出会いを大切にしたいものです。

作れますが、磨製石器は指先を自由に動かせる人間しか作れないのです。だからもし、世界博物館があるとすればまず最初に展示すべきは岩宿の磨製石器です。歴史の教科書では、この時代を先土器時代とか無土器時代と書いていますが、弥生式土器が最初に発見されたのが東京弥生町なので弥生時代と呼ぶように、これからはこの時代を岩宿時代と教えるべきなのだと思います。竹田先生力説しています。竹田先生の説によれば、縄文時代の前の二万年の間は岩宿時代ということになるのです。みどり市のマスコット



キャラクター「みどりモス」は、相沢忠洋さんが発見した石器と同じ時代には日本にもマンモスが生息していただろうという推測から、みどり市のマンモスで「みどりモス」と名が付けられました。みどりモスは三万五千歳の男の子で誕生日は一月二十七日、性格はやんちゃだけどかわいというプロフィールになりました。世界中のゆるキャラの中でみどりモスは最年長の男の子、岩宿時代のみどりモスをみんな応援しましょう。

靖ちゃん日記

令和三年一月十七日(日)
親子三代、上毛かるたで遊んだ。上毛かるたが誕生して七十余年、今や全国大会が開かれるまでに。自分が子供の頃に覚えたかるたを六歳の孫が暗記して、「き」と言うところ、「つ」と言え(はた)どころ、「こ」と言うだけ、「鶴舞う形の群馬県」と即座に答える。上毛かるたは遊びながら郷土の偉人や歴史がすべて郷土愛も深められる。琉馬と一対一で勝負をした。最初は手加減してやろうと思っていたが途中から本気になり、力を入れた。指を痛めた。それでも記憶力と反射神経では孫に勝たず、二十三対二十一で負けた。再度挑戦したが今度は二十五対十九で大敗した。「上毛かるた」とかけて「合コンで彼女をゲット」ととく。その心は「どちっちも手の早い者が勝つ」というぞろぞろがあつた。今度は合コンで孫と勝負をしてみたい。

読み終えて潤む臉や寒明け
「おうち時間」を使い、本棚で埃をかぶっていた山本周五郎の「人情武士道」や「日本婦道記」などの短編小説を久々に読み返しています。世渡りは下手だが相手の心情を思いやる主人公達を自分自身に置き換えて読んでみると共感したり反省させられることばかりです。山本周五郎というペンネームは小学校卒業と同時に奉公に入った「山本周五郎質店」の主人の名。物心両面の恩に報いるためにその名前をもらって使ったそうです。不安続きの昨今、「雨が来る」や「さぶ」などの情感溢れる小説もまた読み返したいと思えます。



第三百七号は令和三年三月一日(月)発行予定です。

やっちゃんの似顔絵提供: ひさかさん